

V その他

感染症発生動向調査解析評価小委員会 「今週のトピックス」

平成 26 年の感染症発生動向調査週報に掲載された、注目すべき感染症についてのコメントである「今週のトピックス」（感染症発生動向調査解析評価小委員会が作成）を全て掲載した。

■平成 25 年 52 週～平成 26 年第 1 週「インフルエンザ 流行期に入る」

平成 25 年の第 52 週は 3,403 例の報告があった。第 1 位は感染性胃腸炎以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、RS ウイルス感染症、咽頭結膜熱の順であった。平成 26 年の第 1 週は 1,017 例と少なく、年末年始休日の影響と思われる。第 1 位は感染性胃腸炎以下、水痘、RS ウイルス感染症、A 群溶連菌咽頭炎、突発性発しんの順である。第 1 週の感染性胃腸炎は前週比 74% 減の 561 例であった。インフルエンザは前週比 18% 増の 512 例、定点あたり 1.7 である。流行開始の目安である 1.0 を超えている。A (H1) pdm09 亜型が優位だが、A (H3) 亜型、B 型のインフルエンザウイルスも分離されている。麻しんの報告はなく、風しんは 2 例であった。

■平成 26 年第 1 週「インフルエンザ 急増」

第 2 週は前週比 212.6% 増の 3,179 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、水痘、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 9.4、2.3、2.0、1.1、0.4 であった。感染性胃腸炎は前週比 232% 増の 1,861 例で、中河内 13.9、北河内 13.6 と続く。水痘は 127% 増の 460 例で、南河内 5.4、泉州 4.0 の順である。A 群溶連菌咽頭炎は 371% 増の 396 例の報告で、堺市 3.5 と高い。インフルエンザは 262% 増の 1,854 例の報告があり、定点あたり 6.0 となった。大阪市西部 14.7 が目立つ。報告数が急増しており、注意が必要である。麻しん、風しんはそれぞれ 1 例の報告であった。

■平成 26 年第 2 週「インフルエンザ 注意報レベルへ」

第 3 週は前週比 19.2% 減の 2,569 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、RS ウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 8.1、1.9、1.1、0.8、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比 14% 減の 1,604 例の報告で、北河内 12.3 である。A 群溶連菌咽頭炎は 7% 減の 369 例で、大阪市東部 3.4 であった。水痘は 54% 減の 212 例である。インフルエンザは 136% 増の 4,384 例で、定点あたり 14.2 である。大阪市西部 25.4、南河内 18.8 を含む 9 ブロックで注意報レベルの 10 を超えた。A (H1) pdm09 亜型が優位である。学級閉鎖の報告が急増している。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 3 週「インフルエンザ 流行加速」

第 4 週は前週比 19.3% 増の 3,065 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、RS ウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 10.0、2.2、1.4、0.8、0.5 であった。感染性胃腸炎は前週比 23% 増の 1,976 例の報告で、北河内 13.6 である。A 群溶連菌咽頭炎は 20% 増の 443 例、水痘は 30% 増の 276 例であった。インフルエンザは 80% 増の 7,876 例で、定点あたり 25.7 である。南河内 43.1、大阪市西部 40.7、堺市 30.8 の 3 ブロックで警報レベルの 30 を超えた。他の 8 ブロックでも注意報レベルの 10 を超えている。脳症合併例の報告もある。輸入麻しんの報告が 1 例あった。風しんの報告はなかった。

■平成26年第5週「インフルエンザ 警報レベルに」

第5週は前週比14.1%減の2,633例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、RSウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.0、2.3、1.0、0.8、0.4であった。感染性胃腸炎は前週比19%減の1,601例で、全ブロックで減少した。北河内11.6である。インフルエンザは18%増の9,319例で、定点あたり30.3と警報レベルの30を超えた。6ブロックで30を超えており、南河内51.5、大阪市西部44.3が目立つ。残りの5ブロックでも20を超えている。A(H1N1)pdm09亜型が流行の主流株である。麻しんは輸入例からの家族内感染の1例、風しんは1例の報告であった。

■平成26年第6週「インフルエンザ ピーク越える」

第6週は前週比15.4%減の2,228例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、RSウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.8、1.9、0.9、0.6、0.4であった。感染性胃腸炎は前週比16%減の1,347例、中河内9.3、南河内9.0である。インフルエンザは前週比22%減の7,315例、定点あたり23.8とピークを越えた。南河内35.6、大阪市西部30.3の2ブロックで依然警報レベルの30を超えているが、全ブロックで減少した。麻しんの報告は1例で、第4週から続けて3例目である。いずれもフィリピンからの輸入事例であった。渡航後の発熱・発しん者には慎重な対応が望まれる。風しんの報告はなかった。

■平成26年第7週「インフルエンザ 減少続く」

第7週は前週比9.5%減の2,017例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、RSウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.6、1.9、1.2、0.5、0.3であった。感染性胃腸炎は前週比17%減の1,113例の報告で、南河内8.6である。A群溶連菌咽頭炎は微増の381例、大阪市東部3.5と高い。水痘は38%増の248例で、中河内1.9であった。インフルエンザは12%減の6,404例、定点あたり20.8である。10ブロックで減少したが、大阪市西部35.0、南河内31.0で警報レベルがなお続いている。麻しんの報告が2例あり、第6週の家族内感染例である。風しんの報告は1例であった。

■平成26年第8週「麻しん 報告続く」

第8週は前週比5.0%増の2,118例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、RSウイルス感染症、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.1、1.9、1.1、0.6、0.4であった。感染性胃腸炎は前週比9%増の1,210例で、中河内8.6である。A群溶連菌咽頭炎は微減の373例で泉州3.0、堺市2.9と続く。インフルエンザは7%減の5,944例で定点あたり19.2である。南河内32.1と警報レベルが続いている。大阪市西部29.7、北河内23.2と高い。麻しんの報告は4例で輸入麻しんに伴う二次感染であった。医療機関や施設等における感染拡大に注意が必要である。風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 9 週「インフルエンザ 再び増加」

第 9 週は前週比 7.0%増の 2,266 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、RS ウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.7、2.3、0.9、0.4、0.4 であった。感染性胃腸炎は前週比 10%増の 1,337 例の報告で、中河内 10.0 である。A 群溶連菌咽頭炎は 21%増の 451 例で、泉州 3.4 であった。水痘は 22%減の 177 例である。インフルエンザは 16%増の 6,885 例、定点あたり 22.3、9 ブロックで増加した。南河内 34.0、大阪市西部 30.5、北河内 30.3 は警報レベルを超えている。麻しんの 2 例はそれぞれ輸入例と家族内感染例であった。風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 10 週「インフルエンザ 減少へ」

第 10 週は前週比 4.1%減の 2,172 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、RS ウイルス感染症、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.5、2.2、1.0、0.4、0.3 であった。感染性胃腸炎は前週比 3%減の 1,302 例の報告で、中河内 9.8、南河内 9.6 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は 3%減の 439 例で、大阪市東部 3.6 であった。水痘は 10%増の 195 例である。インフルエンザは 19%減の 5,554 例で、全ブロックで減少し、定点あたり 18.0 となった。南河内 29.0、北河内 21.6 が目立つ。検出ウイルスは B 型が優位であるが、A (H1) pdm09 亜型、A (H3) 亜型も分離されている。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 11 週「インフルエンザ 微増」

第 11 週は前週比 1.2%減の 2,146 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、RS ウイルス感染症の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.5、2.2、0.8、0.4、0.3 であった。感染性胃腸炎は前週比微減の 1,297 例の報告で、南河内 11.7 である。A 群溶連菌咽頭炎は 2%増の 447 例で、中河内 3.4 であった。水痘は 17%減の 162 例、RS ウイルス感染症は 7%減の 66 例である。インフルエンザは微増の 5,592 例で、定点あたり 18.1 となった。南河内 34.6 が目立ち、5 ブロックで増加した。風しんは 1 例の報告であった。麻しんは 2 例の報告で、内 1 例は成人の輸入麻しんであった。

■平成 26 年第 12 週「インフルエンザ やや減少」

第 12 週は前週比 5.9%減の 2,019 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、RS ウイルス感染症の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.4、1.9、0.7、0.4、0.2 であった。感染性胃腸炎は前週比微減の 1,283 例の報告で、南河内 9.7 である。A 群溶連菌咽頭炎は 15%減の 382 例で、大阪市東部 3.3 であった。水痘は 10%減の 145 例、RS ウイルス感染症は 29%減の 47 例である。インフルエンザは 17%減の 4,665 例で、定点あたり 15.1 となった。南河内で 26.5、大阪市西部で 24.7 と高い。風しんの報告はなく、麻しんは 1 例の報告でフィリピンへの渡航歴があった。

■平成26年第13週「インフルエンザ さらに減少」

第13週は前週比微増の2,034例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、RSウイルス感染症の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.2、1.8、0.8、0.4、0.4であった。感染性胃腸炎は前週比3%減の1,248例の報告で、泉州9.6である。A群溶連菌咽頭炎は7%減の354例であった。水痘は14%増の165例、RSウイルス感染症は66%増の78例である。インフルエンザは37%減の2,941例、定点あたり9.5となった。全ブロックで減少したが、南河内15.4、大阪市西部12.2、北河内10.6で依然高い。風しんの報告は1例であった。麻しんの報告は1例で、第12週報告の輸入麻しんに伴う家族内感染例である。

■平成26年第14週「インフルエンザ 終息へ」

第14週は前週比8.8%減の1,854例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、RSウイルス感染症の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.6、1.3、0.9、0.4、0.3であった。感染性胃腸炎は前週比10%減の1,127例の報告で、南河内9.1、泉州8.9、中河内7.9である。A群溶連菌咽頭炎は27%減の259例で、中河内・南河内1.9であった。水痘は12%増の185例である。インフルエンザは50%減の1,468例、定点あたり4.8となり、全ブロックで警報継続基準値10を下回った。風しんの報告はなく、麻しんは2例の報告があった。1例は第12週報告の輸入麻しんに伴う家族内感染であった。

■平成26年第15週「麻しん 増加続く」

第15週は前週比12.4%増の2,083例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、RSウイルス感染症の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.7、1.5、0.8、0.5、0.3であった。感染性胃腸炎は前週比18%増の1,334例の報告で、泉州11.3、南河内10.2、中河内10.1である。A群溶連菌咽頭炎は14%増の295例で、大阪市東部2.1、水痘は17%減の154例であった。インフルエンザは31%減の1,008例、定点あたり3.3となった。麻しんの報告は4例であった。輸入麻しん2例、施設内感染1例、第14週の家族内感染1例である。第15週までの累計は22例となり、昨年の総数15例を超えた。風しんの報告はなかった。

■平成26年第16週「感染性胃腸炎 増加」

第16週は前週比35.0%増の2,813例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ9.5、2.0、0.9、0.6、0.4であった。感染性胃腸炎は前週比42%増の1,900例で、泉州13.9、南河内13.6、中河内13.5と高い。A群溶連菌咽頭炎は33%増の392例で南河内の3.1が目立つ。水痘は17%増の180例、咽頭結膜熱は30%増の82例である。インフルエンザは3%増の1,042例、定点あたり3.4で、新学期が始まり6歳から19歳で増加がみられた。風しんの報告はなかった。麻しんの報告は3例で、その内1例は家族内感染、1例は輸入麻しんであった。

■平成 26 年第 17 週「感染性胃腸炎 増加続く」

第 17 週は前週比 12.3% 増の 3,158 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しん、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 11.2、2.2、0.7、0.6、0.5 であった。感染性胃腸炎は前週比 18% 増の 2,234 例の報告で、泉州 18.9、南河内 14.9 である。A 群溶連菌咽頭炎は 10% 増の 430 例、大阪市東部 4.1、南河内 3.8 と高い。水痘は前週比 18% 減の 148 例、中河内 1.7 であった。第 5 位の咽頭結膜熱は前週比 28% 増の 105 例で、大阪市北部 1.9 である。インフルエンザは前週比 22% 減の 813 例で、定点あたり 2.6 であった。風しんの報告はなく、麻しんは 2 例の報告で、遺伝子型は B 3 型である。

■平成 26 年第 18 週「感染性胃腸炎 減少」

第 18 週は前週比 13.9% 減の 2,719 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 9.1、1.8、0.9、0.6、0.5 であった。感染性胃腸炎は前週比 19% 減の 1,814 例の報告である。南河内 17.9、中河内 12.2、泉州 11.7 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は 17% 減の 357 例、南河内 2.9、大阪市東部 2.8 であった。水痘は 26% 増の 187 例、大阪市北部 2.3 である。咽頭結膜熱は 21% 増の 127 例、大阪市北部 1.3 であった。インフルエンザは前週比 38% 減の 500 例で、定点あたり 1.6 となった。風しんの報告はなく、麻しんは 3 例の報告であった。

■平成 26 年第 19 週「インフルエンザ 終息か」

第 19 週は前週比微減の 2,707 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 8.4、2.1、1.5、0.5、0.4 であった。感染性胃腸炎は前週比 7% 減の 1,688 例の報告で、北河内 14.3、南河内 13.6 泉州 10.1 である。A 群溶連菌咽頭炎は 16% 増の 414 例で、南河内 3.1 であった。水痘は 56% 増の 292 例で、南河内 3.7 である。咽頭結膜熱は 15% 減の 108 例であった。インフルエンザは 53% 減の 237 例、定点あたり 0.8 となった。9 ブロックで 1 を切り、終息したと思われる。麻しんは輸入麻しんの報告が 1 例であった。風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 20 週「感染性胃腸炎 再び増加」

第 20 週は前週比 35.5% 増の 3,669 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 11.6、3.3、1.2、0.7、0.7 であった。感染性胃腸炎は前週比 37% 増の 2,310 例の報告で、南河内 22.5 と警報開始基準値の 20 を上回り、北河内 15.1、中河内 14.9 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は 666 例と 61% 増加し、北河内 5.3、堺市 4.8 と高い。水痘は 18% 減の 238 例で、中河内 2.5 である。咽頭結膜熱は 36% 増の 147 例であった。インフルエンザは 30% 減の 166 例、定点あたり 0.5 となった。麻しんの報告が 1 例で、風しんの報告はなかった。

■平成26年第21週「A群溶連菌咽頭炎 高水準」

第21週は前週比1.4%減の3,618例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ11.3、3.3、1.1、0.9、0.7であった。感染性胃腸炎は前週比2%減の2,255例で、南河内21.1と依然高い。A群溶連菌咽頭炎は2%減の652例、南河内6.6、豊能4.6、堺市4.3と続く。水痘は8%減の220例、咽頭結膜熱は16%増の170例であった。インフルエンザは13%減の145例、定点あたり0.5となった。1ブロックで1.0を超えている。風しんの報告は1例である。麻しんの報告は2例で、第19週報告の輸入麻しんに伴う家族内感染例であった。

■平成26年第22週「インフルエンザ 終息」

第22週は前週比微減の3,601例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数は各々9.8、3.9、1.4、1.1、0.7である。感染性胃腸炎は前週比13%減の1,954例の報告で、南河内17.3、中河内13.7と続く。A群溶連菌咽頭炎は20%増の785例で、南河内7.2、中河内5.3、北河内5.0と依然高い。水痘は23%増の271例、中河内2.9である。咽頭結膜熱は31%増の222例、中河内3.0、大阪市北部2.1であった。インフルエンザは全ブロックで定点あたり1を切り終息した。麻しんは第21週の2次感染例と感染源不明のそれぞれ1例であった。風しんの報告は1例であった。

■平成26年第23週「夏型感染症 増加の兆しか」

第23週は前週比16.6%減の3,002例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.1、3.0、1.4、1.2、0.8であった。感染性胃腸炎は前週比28%減の1,412例の報告で、南河内12.4である。A群溶連菌咽頭炎は23%減の601例、南河内4.9、中河内4.7と高い。水痘は3%増の278例、南河内2.9であった。咽頭結膜熱は12%増の248例、中河内3.3と高く、警報開始基準値の3を超えた。大阪市北部2.3と続く。ヘルパンギーナは37%増の152例、7位の手足口病は36%増の49例であった。麻しん、風しんの報告はともになかった。

■平成26年第24週「夏型感染症 増加」

第24週は前週比0.4%減の2,991例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、水痘、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.4、3.1、1.5、1.4、1.2であった。感染性胃腸炎は前週比10%減の1,275例で、南河内11.5である。A群溶連菌咽頭炎は3%増の618例、南河内5.7、堺市5.1と目立つ。水痘は6%増の295例で、中河内が3.2と高い。ヘルパンギーナは80%増の274例の報告であった。大阪市北部2.9と高く、中河内2.1、南河内2.0である。咽頭結膜熱は微減の243例、中河内2.7が目立つ。第7位の手足口病は39%増の68例である。風しん、麻しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 25 週「ヘルパンギーナ 増加」

第 25 週は前週比 5.6%減の 2,823 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、水痘の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 5.5、2.7、2.3、1.2、1.0 であった。感染性胃腸炎は前週比 15%減の 1,090 例の報告で、南河内 9.0、中河内 8.8、泉州 7.0 である。A 群溶連菌咽頭炎は 11%減の 548 例で、南河内 4.9、中河内 4.6 であった。ヘルパンギーナは 69%増の 463 例、北河内 4.3、大阪市北部 3.6、中河内 3.5 である。咽頭結膜熱は 3%減の 236 例、中河内 3.2 と目立つ。第 7 位の手足口病は 18%増の 80 例であった。麻しんは同じ職場内で 2 例の報告があった。風しんは 1 例であった。

■平成 26 年第 26 週「ヘルパンギーナ さらに増加」

第 26 週は前週比 5.2%増の 2,970 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 5.1、3.1、2.7、1.1、1.1 であった。感染性胃腸炎は前週比 6%減の 1,024 例の報告で、中河内 9.0、北河内 7.2、南河内 7.1 である。ヘルパンギーナは 32%増の 613 例、大阪市北部 5.7 を筆頭に中河内 5.0、大阪市南部 4.4、北河内 4.2 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は微減の 546 例で、豊能 4.5 であった。咽頭結膜熱は 10%減の 212 例、中河内 2.2 と減少した。第 7 位の手足口病は 3%増の 82 例であった。麻しんは 3 例の報告があった。風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 27 週「ヘルパンギーナ 増加つづく」

第 27 週は前週比 7.5%増の 3,193 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A 群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 4.9、4.9、2.4、1.1、1.0 であった。感染性胃腸炎は前週比 4%減の 984 例の報告で、中河内 8.9 である。ヘルパンギーナは 60%増の 982 例、北河内 9.1、大阪市北部 8.7、中河内 6.4 と警報開始基準値の 6 を超えた。さらに大阪市南部 5.7、豊能 4.5 と続く。今後の動向に注意が必要である。A 群溶連菌咽頭炎は 13%減の 473 例、南河内 3.4、咽頭結膜熱は 4%増の 221 例、中河内 3.7 である。麻しんは渡航歴のない 4 例の報告があった。風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 28 週「ヘルパンギーナ 警報レベル超える」

第 28 週は前週比 8.4%増の 3,460 例の報告があった。報告の第 1 位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A 群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 7.0、4.6、2.3、0.9、0.8 であった。ヘルパンギーナは前週比 43%増の 1,400 例、北河内 12.9、大阪市北部 12.6、中河内 8.2、豊能 8.0、三島 6.9、大阪市南部 6.3 と 6 ブロックで警報開始基準値の 6 を超えた。感染性胃腸炎は 7%減の 913 例の報告で、中河内 9.3 である。A 群溶連菌咽頭炎は微減の 464 例、中河内 4.5、咽頭結膜熱は 24%減の 168 例、中河内 2.3 である。麻しん、風しんはともに 1 例の報告があった。

■平成26年第29週「ヘルパンギーナ 警報レベル続く」

第29週は前週比微減の3,459例の報告があった。報告の第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.4、3.6、1.9、0.9、0.8であった。ヘルパンギーナは前週比20%増の1,679例の報告で、北河内13.9、大阪市北部12.2、豊能11.3と高い。7ブロックで警報開始基準値6を超えている。感染性胃腸炎は20%減少し、727例の報告で、南河内6.5である。A群溶連菌咽頭炎は19%減の376例、中河内3.2であった。咽頭結膜熱は11%増の187例、中河内2.3である。水痘は9%減の169例であった。麻しんの報告は1例、遺伝子型H1であった。風しんの報告はなかった。

■平成26年第30週「ヘルパンギーナ ピーク越える」

第30週は前週比22.6%減の2,677例の報告があった。報告の第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A群溶連菌咽頭炎、水痘、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.7、3.2、1.3、0.9、0.8であった。ヘルパンギーナは1,131例の報告で、前週より33%減少した。大阪市北部9.9、北河内9.3を含む3ブロックで依然警報開始基準値6を超えている。感染性胃腸炎は11%減の649例の報告で、中河内6.1であった。A群溶連菌咽頭炎は32%減の255例、中河内2.9である。水痘は2%増の173例で中河内・南河内1.7であった。咽頭結膜熱は17%減の156例で大阪市北部1.9である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成26年第31週「ヘルパンギーナ 減少」

第31週は前週比4.4%減の2,558例の報告があった。報告の第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.1、3.8、1.4、1.0、0.9である。ヘルパンギーナは前週比27%減の828例、北河内8.5、南河内6.1と高く、中河内5.1と続く。感染性胃腸炎は18%増の764例、中河内6.4、泉州6.2である。A群溶連菌咽頭炎は6%増の270例で、豊能・南河内2.1であった。咽頭結膜熱は31%増の204例、南河内3.3である。水痘は微減の172例、中河内2.2であった。麻しんの報告はなく、風しんは1例の報告があった。

■平成26年第32週「ヘルパンギーナ 減少続く」

第32週は前週比22.1%減の1,993例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.4、2.5、1.2、0.8、0.7である。感染性胃腸炎は前週比12%減の670例、南河内5.8、北河内5.4であった。ヘルパンギーナは40%減の498例、大阪市北部4.4である。6ブロックで依然警報終息基準値2を超えている。A群溶連菌咽頭炎は10%減の242例、北河内2.1であった。咽頭結膜熱は19%減の166例、水痘は24%減の130例である。麻しんの報告は1例で、フィリピンへの渡航歴があり、遺伝子型はB3型であった。風しんの報告はなかった。

■平成26年第33週「夏型感染症 減少」

第33週は前週比26.8%減の1,459例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ2.5、1.6、0.7、0.7、0.6である。感染性胃腸炎は前週比27%減の490例、中河内4.9、三島4.2、泉州4.0であった。ヘルパンギーナは36%減の319例である。大阪市北部3.2を始め、5ブロックで警報終息基準値2以上である。コクサッキーウイルスの他、パレコウイルス3型も検出されている。A群溶連菌咽頭炎は39%減の147例で、堺市・泉州1.1であった。咽頭結膜熱は17%減の138例である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 34 週「ヘルパンギーナ 終息へ」

第 34 週は前週比 15.6% 増の 1,686 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A 群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 3.1、1.2、1.0、0.7、0.7 であった。感染性胃腸炎は前週比 25% 増の 610 例の報告で、泉州 5.2、中河内 4.2 と続く。ヘルパンギーナは 26% 減の 236 例、5 週連続で減少した。全ブロックで警報終息基準値の 2 を切り、流行は終息に向かっている。A 群溶連菌咽頭炎は 35% 増の 199 例の報告で、豊能 1.9 である。咽頭結膜熱は前週と同数の 138 例、南河内 1.9 であった。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 35 週「RS ウイルス感染症 増加の兆し」

第 35 週は前週比微減の 1,671 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RS ウイルス感染症、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 3.4、0.9、0.8、0.8、0.7 であった。感染性胃腸炎は前週比 10% 増の 670 例の報告で、中河内 5.9 である。A 群溶連菌咽頭炎は 11% 減の 178 例、南河内 1.6 であった。ヘルパンギーナは 30% 減の 166 例の報告である。RS ウイルス感染症は 106% 増の 161 例、8 週連続で増加している。南河内 1.8、大阪市西部 1.6 である。麻しんの報告はなく、風しんの報告は 1 例であった。9 月 2 日にデング熱の国内感染事例が府内でも報告されている。

■平成 26 年第 36 週「RS ウイルス感染症 増加」

第 36 週は前週比 8.1% 増の 1,807 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、RS ウイルス感染症、A 群溶連菌咽頭炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 3.4、1.3、1.2、0.7、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比微増の 683 例の報告で、北河内・泉州 5.0 である。RS ウイルス感染症は 60% 増加し、258 例の報告で、9 週連続増加した。中河内 2.3、南河内 2.2 であった。A 群溶連菌咽頭炎は 39% 増の 248 例で、南河内 2.2、中河内 2.0 である。咽頭結膜熱は 7% 増の 148 例で、南河内 2.1、中河内 1.6 であった。都内で感染し府内で検出されたデングウイルスは 1 型と確定診断された。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 37 週「RS ウイルス感染症 さらに増加」

第 37 週は前週比 11.6% 増の 2,016 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、RS ウイルス感染症、A 群溶連菌咽頭炎、突発性発しん、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 3.6、1.8、1.7、0.7、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比 5% 増の 717 例の報告で、南河内 5.7、中河内 5.3、泉州 5.2 である。RS ウイルス感染症は 41% 増加し、365 例の報告で、10 週連続増加した。南河内 3.6、中河内 3.1、大阪市西部 2.9、北河内 2.2 であった。A 群溶連菌咽頭炎は 38% 増の 343 例で、大阪市南部 3.7、中河内 2.6 である。第 5 位の咽頭結膜熱は 14% 減の 127 例であった。南河内 1.6 である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 38 週「RS ウイルス感染症 増加続く」

第 38 週は前週比 9% 減の 1,834 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、RS ウイルス感染症、A 群溶連菌咽頭炎、突発性発疹、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 3.6、1.9、1.5、0.6、0.5 であった。感染性胃腸炎は前週比微減の 709 例の報告で、中河内 6.6、南河内 5.5 である。RS ウイルス感染症は 3% 増の 377 例の報告で、北河内 3.5、中河内 3.1、大阪市西部 2.9 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は 12% 減の 302 例、大阪市南部 3.4 と目立つ。咽頭結膜熱は 28% 減の 92 例、南河内 1.6 である。ヘルパンギーナは全ブロックで定点あたり 1 を下回り、終息した。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成26年第39週「RSウイルス感染症 高水準続く」

第39週は前週比5.7%増の1,939例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.7、1.9、1.7、0.6、0.5であった。感染性胃腸炎は前週比4%増の734例の報告で、中河内6.9、泉州4.6、北河内4.5である。RSウイルス感染症は3%増の387例の報告で、北河内3.4、中河内・南河内2.8、大阪市北部2.1と続く。9ブロックで1を超えており、今後も注意が必要である。A群溶連菌咽頭炎は14%増の343例、中河内2.6である。水痘は70%増加し117例、三島1.2である。麻疹、風しんの報告はなかった。

■平成26年第40週「RSウイルス感染症 僅かに減少」

第40週は前週比微減の1,930例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、突発性発しん、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.1、1.8、1.6、0.6、0.5であった。感染性胃腸炎は前週比11%増の815例の報告で、泉州5.7、中河内5.6、南河内5.5と続く。RSウイルス感染症は9%減の351例の報告で、大阪市西部2.8、大阪市北部2.7、北河内2.5である。28週以降増加が続いていたが、12週ぶりに減少した。9ブロックで1を超えており、依然高水準である。A群溶連菌咽頭炎は6%減の322例、堺市2.5、中河内2.4であった。麻疹、風しんの報告はなかった。

■平成26年第41週「RSウイルス感染症 減少続く」

第41週は前週比8.7%減の1,762例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.9、1.4、1.4、0.6、0.5であった。感染性胃腸炎は4%減の785例、中河内・南河内6.4、泉州5.5、大阪市南部5.3の順である。RSウイルス感染症は19%減の285例、北河内2.4、南河内1.9、大阪市東部・南部1.7であった。堺市と大阪市南部を除く9ブロックで減少した。A群溶連菌咽頭炎も16%減の269例、豊能2.0、堺市1.8、中河内1.6である。水痘は28%増の122例、中河内1.2、大阪市北部1.1であった。麻疹、風しんの報告はなかった。

■平成26年第42週「感染症 端境期」

第42週は前週比6.6%減の1,645例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しん、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.7、1.4、1.0、0.5、0.5であった。感染性胃腸炎は前週比5%減の744例の報告で、中河内7.4、南河内5.8、大阪市南部4.2、北河内4.1である。A群溶連菌咽頭炎は7%増の288例で、北河内・中河内2.1であった。RSウイルス感染症は29%減の201例、南河内2.3、北河内1.7である。水痘は15%減の104例、大阪市北部1.1であった。麻疹、風しんの報告はなかった。麻疹は32週以降報告されていない。

■平成26年第43週「感染性胃腸炎 流行の兆しか」

第43週は前週比23.4%増の2,030例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しん、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.2、1.7、1.3、0.6、0.6であった。感染性胃腸炎は前週比38%増の1,028例の報告で、9ブロックで増加している。中河内8.1、南河内7.6、北河内6.8、大阪市北部6.2である。A群溶連菌咽頭炎は19%増の342例で、豊能2.9、中河内2.5であった。RSウイルス感染症は26%増の253例、南河内2.8、北河内1.7である。水痘は、全ブロックで定点あたり1を下回っているが、前週比7%増加している。麻疹、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 44 週「感染性胃腸炎 増加」

第 44 週は前週比 10.8% 増の 2,249 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、水痘、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.3、1.8、1.1、0.7、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比 22% 増の 1,251 例の報告で、南河内 10.8 を筆頭に、北河内 10.2、大阪市西部 8.0 と続く。2 週連続増加し、今年の同時期に比し 48% 多い。ノロウイルスによる集団発生事例が増加している。A 群溶連菌咽頭炎は 4% 増の 354 例、堺市 3.0、中河内 2.8 であった。RS ウイルス感染症は 11% 減の 224 例、南河内 2.6 である。水痘は 19% 増の 132 例、大阪市北部 1.6 であった。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 45 週「インフルエンザ 増加の兆し」

第 45 週は前週比 2.6% 増の 2,308 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、水痘、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 6.1、1.8、1.2、0.7、0.7 であった。感染性胃腸炎は前週比 2% 減の 1,224 例の報告で、南河内 10.4 を筆頭に、北河内 9.8、中河内 7.5、泉州 7.2 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は微減の 353 例で、中河内 2.8、堺市 2.8 であった。RS ウイルス感染症は 7% 増の 239 例、北河内 2.5 である。水痘は 8% 増の 142 例、南河内 1.4 である。インフルエンザが 50% 増の 66 例であった。今後の動向に注意が必要である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成 26 年第 46 週「感染性胃腸炎 増加」

第 46 週は前週比 24.5% 増の 2,874 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、水痘、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 8.4、2.1、1.3、0.9、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比 37% 増の 1,674 例で、南河内 13.0 を筆頭に中河内 12.7、北河内 11.1 と続く。ノロウイルスによる集団発生事例が報告されている。A 群溶連菌咽頭炎は 19% 増の 420 例で、南河内 3.5、豊能 3.0 である。RS ウイルス感染症は 8% 増の 259 例、水痘は 20% 増の 170 例であった。インフルエンザは 32% 増の 87 例、大阪市西部 1.3 である。麻しんの報告はなく、風しんの報告は 1 例であった。

■平成 26 年第 47 週「感染性胃腸炎 さらに増加」

第 47 週は前週比 17.2% 増の 3,369 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、水痘、突発性発しんの順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 10.5、2.5、1.4、0.8、0.6 であった。感染性胃腸炎は前週比 25% 増の 2,097 例で、南河内 18.6 を筆頭に、中河内 15.8、泉州 15.0 と続く。A 群溶連菌咽頭炎は 20% 増の 503 例で、中河内 4.4、豊能 3.9 である。RS ウイルス感染症は 7% 増の 276 例で、南河内 3.9 と高い。インフルエンザは 174% 増の 238 例で、定点あたり報告数は 0.8 であった。大阪市西部 5.3 が目立つ。麻しんの報告はなく、風しんの報告は 1 例であった。

■平成 26 年第 48 週「インフルエンザ 流行始まる」

第 48 週は前週比微増の 3,384 例の報告があった。報告の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶連菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、水痘、咽頭結膜熱の順である。上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 10.3、2.4、1.6、1.0、0.5 であった。感染性胃腸炎は前週比 2% 減の 2,063 例で、南河内 17.1、泉州 15.5、北河内 15.1 の順である。A 群溶連菌咽頭炎は 3% 減の 486 例で、中河内 4.4 であった。RS ウイルス感染症は 15% 増の 317 例で、大阪市北部 2.9 である。インフルエンザは 92% 増の 457 例で、定点あたり 1.5 と流行開始の目安の 1 を超えた。10 ブロックで増加している。AH3 亜型が分離されている。風しんの報告はなく、麻しんは 1 例で、遺伝子型 D8 であった。

■平成26年第49週「インフルエンザ 増加」

第49週は前週比14.1%増の3,861例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶連菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ11.4、2.6、2.1、1.2、0.5であった。感染性胃腸炎は前週比11%増の2,287例で、南河内21.1を筆頭に、中河内17.9、泉州16.7と続く。A群溶連菌咽頭炎は7%増の521例で、中河内4.4、堺市4.1と高い。RSウイルス感染症は33%増の421例で、大阪市北部・西部3.8である。インフルエンザは86%増の852例で、定点あたり2.8である。大阪市西部7.9、大阪市北部3.7と続く。流行の主流株はAH3亜型である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成26年第50週「インフルエンザ さらに増加」

第50週は前週比2.9%増の3,973例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ10.8、3.1、2.7、1.2、0.5であった。感染性胃腸炎は5%減の2,174例で、南河内18.7、泉州15.7、北河内15.0と続く。RSウイルス感染症は48%増の621例で、大阪市北部6.2、南河内5.3である。A群溶連菌咽頭炎は2%増の533例で、南河内3.5であった。インフルエンザは前週比159%増の2,204例、定点あたり7.1である。大阪市西部12.7、中河内10.2で注意報レベルの10を超えた。麻しんの報告はなく、風しんは1例であった。

■平成26年第51週「インフルエンザ 注意報レベル超える」

第51週は前週比7.6%減の3,673例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ10.0、2.9、2.4、1.3、0.5であった。感染性胃腸炎は前週比7%減の2,012例で、中河内15.4、南河内14.4、泉州13.3、北河内13.1と続く。RSウイルス感染症は7%減の577例で、大阪市北部6.2、南河内5.1である。インフルエンザは145%増の5,390例、定点あたり17.4である。大阪市西部・南河内26.1を筆頭に中河内24.1と続き、すべてのブロックで注意報レベルの10を超えた。主な流行株はAH3亜型である。麻しん、風しんの報告はなかった。

■平成26年第52週「インフルエンザ 警報レベル超える」

平成26年第52週と平成27年第1週をあわせて報告する。第52週は2,967例の報告があった。第1位は感染性胃腸炎以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順であった。

第1週の報告数は921例と少なく、年末年始の影響と思われる。第1位は感染性胃腸炎以下、RSウイルス感染症、A群溶連菌咽頭炎、水痘、突発性発しんの順である。

第1週の感染性胃腸炎は前週比72%減の436例であった。

インフルエンザは第52週で前週比91%増の10,321例、定点あたり33.6となり、警報レベル開始基準値の30を超えた。インフルエンザウイルスAH3亜型が分離されている。

麻しん、風しんの報告はなかった。